

おはようおじさん

氏田 裕也

これは今から三十年ほど前の、平戸市津吉町での話です。昭和五十年、この町に「電報電話局」が開設され、おじさんは初代局長としてここに赴任しました。おじさんの名前は、角田実さんといっています。

赴任して間もない日の朝、おじさんが局の前に立っていると、名前も知らない子ども「おはようございませう」と、とても元気な朝のあいさつが耳に飛び込んできました。おじさんは、びっくりしながらも負けずに元気よく「おはよう」とあいさつを返し、その子を見送りました。おじさんは、いろいろな町で仕事をしてきましたが、こんな気持ちのよいあいさつを経験したのは初めてで、このあいさつにとっても感激したのです。

この子との元気な「おはよう」のあいさつで、おじさんは決意しました。「あいさつはすばらしい。自分もあの子に負けないあいさつをしよう。あいさつのすばらしさを多くの子どもたちに伝えよう。」

次の日から、おじさんは毎日、子どもが登校する時間と子どもが下校する時間に、局の前に立ち続けました。雨の日も風が強い日も、お日さまがじりじり照りつける日も凍りつくような寒い日も。お天気は関係ありませんでした。朝は、「おはよう」に「車に気をつけて」などの言葉をつけ加えました。帰りには「おかえり」「さようなら」に「道草するなよ」などの言葉をつけ加えました。雨で濡れて帰る子どもがいると、かさを貸してあげることもありました。ただ、あいさつを交わすだけではなかったのです。

「おはよう」の輪は一人の子どもから、二人、三人と広がり、小学生のみんなに広がっていきました。さらに、中学生や地域の人にも広がり、津吉の町には今まで以上にあいさつの声が飛び交うようになり、いっそう明るい町になりました。

おじさんは、いつも明るく元気にあいさつをする津吉の子どもたちが、ますます好きになり、もっと子どもたちを応援したいという気持ちになりました。運動会や卒業式などの学校行事や地域の行事には必ず出席をし、「がんばれ」「おめでとう」と温かく力強く励まし続けました。卒業生には、「卒業おめでとう」の心のこもった手紙も送

りました。

おじさんは、三年後に長崎市へ転勤しました。津吉の町を去った後も、多くの子どもたちと文通を続け、就職した時や成人式の時には、手紙に記念品を添えてお祝いを伝え続けました。また、時間をつくって、その後も元気なあいさつを続けているか見に来ることもありました。変わらない「おはよう」「さようなら」の声を聞くと安心して長崎へ帰って行きました。

あの時の子どもたちも今は、お父さんお母さんになっていきます。今は、その子どもたちがあの時に負けない、明るく元気なあいさつを続け教えを受け継いでいます。

おじさんは、今から十四年前、津吉の町のあいさつ運動がいつまでも続くようにと願いながら、七十三歳で亡くなりました。その後、お父さん、お母さん、地域の人たちは、おじさんの教えと感謝の気持ちを忘れないようにしようと記念碑を建てました。そこにはおじさんの思いが込められた「あいさつの三徳」の言葉が刻まれ、津吉小学校の校庭で、今も子どもたちを応援しています。

あいさつの三徳

あいさつには三つの徳がある

- 一 気持ちのよいあいさつは
相手の心を明るくする
- 二 気持ちのよいあいさつをする人は
誰からも好かれる
- 三 気持ちのよいあいさつをすれば
自分の心も豊かになる

おはようおじさん

角田

実

